

南琉球八重山語石垣島白保方言の記述研究

占部, 由子

<https://hdl.handle.net/2324/4784378>

出版情報 : 九州大学, 2021, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名	占部 由子				
論 文 名	南琉球八重山語石垣島白保方言の記述研究				
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	下地	理則
	副 査	九州大学	教授	久保	智之
	副 査	九州大学	教授	上山	あゆみ
	副 査	九州大学	講師	太田	真理
	副 査	九州大学	准教授	青木	博史
	副 査	琉球大学	名誉教授	狩俣	繁久

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、南琉球八重山語石垣島白保方言（以下、白保方言）の体系の概要を示した記述文法書である。白保方言は沖縄県石垣島宇白保集落で話されている。話者数は 50 人程度であり、かつその全てが高齢者という、深刻な消滅の危機に瀕した琉球諸語の 1 つである。本論文は、申請者自身の現地調査に基づく一次資料を主要なデータとし、当該言語体系全体を様々な観点から俯瞰した 11 章からなり、これに申請者自身が書き起こした 45 ページに及ぶ談話資料を補遺としてつけている。

本論文の貢献は、大きくは 4 点にまとめられる。第 1 点目に、本論文は白保方言の記述文法書としては初の成果であり、また 50 人程度という話者数を考慮するとおそらく最後の成果となることが予想される。これまで特定の現象に関する部分的記述にとどまっていた白保方言について、その言語体系の全体像を示した点で極めて重要な研究成果である。第 2 点目に、白保方言の記述を通して、一般言語学に対する重要な知見を多数提供している点が挙げられる。例えば、極めて限られた語彙における有声鼻音と無声鼻音の音韻的対立、日琉諸語では極めて珍しい無生物名詞への複数標示、節タイプに敏感な目的語の格標示など、音韻から文法にわたって幅広く報告されており、いずれも本論文が初めて報告するものばかりであり、それらは琉球語研究、日本語研究、そして言語類型論研究への示唆に富む。第 3 点目に、言語接触研究への重要な知見となっている点が挙げられる。本論文 1 章でも詳しく論じられているように、白保方言は極めて特異な成立過程を持つことで注目されている。すなわち、石垣島にある白保集落は、1713 年と 1771 年の 2 度、南方に遠く離れた波照間島から 300 人規模の移住者が移住して成立したことがわかっている。従って、波照間島方言の特徴を部分的に維持し、一方で石垣島の周辺方言の影響も受けるなど、言語接触の観点で重要な知見を与えてくれる方言である。波照間島方言についてはすでに麻生(2020)の記述文法書があり、本論文の完成により、これら 2 つの方言の本格的な比較対照が可能になったと言える。第 4 点目に、これから話者が激減ないし消滅していく方言の記述研究のあり方を提示した点が挙げられる。本論文の執筆は 2019 年から 2021 年にかけて行われたが、そのほとんどの期間が新型コロナウイルス感染症による影響を受けており、本論文は現地調査の機会のほとんどが失われた状態で書かれたと言える。そこで、談話資料を最大限に活用しつつ、それでも不足するデータに関しては、どのようなデータが存在すれば仮説の検証が可能なのか、どのような調査を行えば現在の不明点が明らかになるかを明示する形で記述を進めている。奇しくも、これから消滅危機方言研究が直面する「現地調査が不可能な状態」を先取りして経験した研究であると言え、そのような中でもここまでの記述が可

能であることを実証している点で、消滅危機方言研究の文脈において大変に意義深い研究である。

本論文にはもちろん、改善すべき点も存在する。特に、上で述べたコロナ禍による現地調査の不十分さにより、記述の多くが必ずしも掘り下げられていない点は審査でも指摘された。しかしながら、現地調査の不足を補うために談話資料を巧みに活用し、さらに上記の通り、コロナ禍が過ぎ去った後の研究を見越して、不十分な記述を改善するにはどのようなデータがどれだけ必要かを明示的に論じている点は積極的に評価されるべきである。

よって本調査委員会は、本論文を提出した学位申請者が、博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。